蔣語中興來由　壽面

談洲楼焉馬門人 立川談笑落語會之摺物

○立川談笑 鉄炮町ニ住す 俗称 足袋屋庄八

立川談笑ハもと焉馬老人の需うけてはじめて噺をあつめて作名を紀せしより一ツの向両国広小路なる福屋吉五郎が楼にて素人の噺をあつめて日々人をあつめて渇えせしめて老人ゝつくり作名ともなりて

その[illegible]ナツメ馬[illegible]今より十五六年以前[illegible]人を四五年ニ経て世を[illegible]今にて談笑也[illegible]人可楽ニ[illegible]

文化十二年乙亥秋[illegible]

三馬

當時二代談笑ハ三笑亭可樂門人於董亭祖樂が改名しける也

此會は文化五年
秋六年の秋乱
本年月進ぬ考

立川談笑

澤東金

○當時おとしはなし流行す紀事由

まつ朱江戸において落語中興の祖は立川談洲楼烏亭焉馬老人なり現天明六年
丙午四月むかふ岡（葛飾なる牛岡をさしてかくいふ）むさし屋橋三が亭において（橋三を料理茶屋之中国屋一名葛西太郎とかくいふ者に次ぐる）
この所ゆへしが葛西太郎は家衰へて今はむさし屋橋三は地の甲なり
大ちく屋七五ら左屋文治などすべてこれに次ぐ其他相あるべし　はじめて落語の會あり（寝惚先生四方赤良）
此所に落語會の諸條を作文して○むかふ岡の武蔵屋にて此の所の會が橋三りまずとしてこれ此の江戸にて名なる相撲人
四方赤良をさきとはじめとしてありしうどひて具ぞしこのかし　相撲屋四方赤良を頼大人此頃いまだ
廉頭郎を頼と所のふひなり
此日を所し會の相文を作る　その後向ふ岡橋尾上所なる京屋といへる茶屋の楼まで毎月
其所の定會ありされど價を定めて聽衆とまねくはあらず　初めて同毎に人くあつまり
其に拙諸して具ずるのこと此後ゆゑありて定會を禁ぜられいまの頃ようやゝ　今相
吉例として毎年正月廿一日ふ岡尾上所柏屋吉五郎が楼上にて此所の會なるされど
其所にあといふことなり　悔りて宮治拾遺物語の事に戯作拙諸と拙あらず　會日床の間
ある鄰松先生の画のひし　松本郎行樂の図の絹幅を掛け　神酒等に黍団粉を備ふ
これは向ふにはじめて會ありし　何とも字傳来ある　掛物之焉馬大人は寛保三年癸

京乃吉生今文化十二乙亥年にいたりて年齢七十三歳也 去る文化十一年甲戌五月
十七日本所五ツ目天恩山羅漢寺においても年賀の莚を開く 此の例の桝屋にて
何よりも一ばんの枝ありて羅漢寺に奉りしが 家根に似たる五葉松を五ツ目
橋の下に繋ぎおき 桝屋より来る客をはこぶにはむかへて 五ツ目より渡し場にて送迎
五代目市川団十郎が
作家の名也
出品も 此頃は素顔大人なり 催し給ひし所に便船して一石
橋より上りける諸国の人 くもかれど もおそいに来て 戯を尽くしもあつまりぬ

桝屋よりひさしかたなる羅漢寺まつりしけるて　三馬

羅漢寺へゆくも ○ぬ 淡洲擬馬も舎人ぶりけれんじや

市川七代目団十郎 ○ぬ乃何曽模様と称ふる紋所に着て
江戸中へ風ふ流行りて 須のもとく 一面所が様 物の標になす

○水魚亭魯石 俗称石井宗叔といふ医人 生質能辯にて 自作の咄を
柳講し 人の耳を喜ばしめて坐敷を勤め はなしの寛政年中大きに
行はる 此人没してのち 二代石井宗叔と名のり 文化年中昼夜講席
を勤む 二代宗叔をはじめ通笑亭文馬と号す
小網町に住して医を業とする 後年廃業

○業とする者也

○浄瑠璃小唄軍書読 手妻 八人芸 説経などいふ文人わざはいくらもありしが 咄家と定
請して一席の料を定め 看客聴衆を集る家あり 此講席 新道小路に
数多ありて 俗に寄せ場 或はヨセといふ 此ヨセといふ席に出て
今専ら落話を演ずる者となりぬ 柳講席に出て昼夜とも噺 さる講
さかりはじめて寛政十年戊午六月 大坂下り岡本万作といふ者 神田
豊島町藁店の講席を勤む 是より咄家ヨセに出て咄し 料物
を得る事 はじまり也

○此ちらしといふものを往古より人をあつめし時に名をビラと呼べり
ひろく披露くことを鄙言にびろうといふ訛りてビラとよび
ちらしの略称なるべし

○大阪下り岡本万作ちらしの圖

頓作軽口噺しといへるは
万作素人ならざるを
此頃専ら行ふの者也
此万作初めて二ヶ年なる
江戸へ備わりヨセを流行し
けるが其始なりとぞ

○こゝに續きて咄しのヨセに出る者、山生亭花楽也 花楽此頃は櫛を製するを
業とする由なるが此戯作を好みしより此万作に倣ひて二三人の友をかたらひ
寛政十年六月下谷柳の稲荷社内にヨセを勤む 連中の者どもは皆同じき仲の素人
素人故業としての職なく五日ほど経ちて廃されてありしとの
種々工夫をこらしながら終に可楽子と名のり法に依りて
其年九月廿八日より不動尊に参詣し家業の櫛を製すべき道具
とりそろへ傳来の家財を売りて待賣代として武州越ヶ谷に趣き十月一日より
講席を催しけるが一人の料物十二銅と定めて大に評判となる 越ヶ谷
より江戸へ帰りし 従来の人あり 此人花楽に向ひて足下
の活花を好みてやむことなくば茶業にして口あらば此人
以来山生亭花楽とかはりて活花などにて常に居ることに候

是迄ありしは何れも縁なかりし故に落語を笑とそのまゝと云ひけるなり

唐山亮渓の三笑を本拠として三笑亭可楽と名のるなるべしと

いへるなり　それより後江戸に始めて三笑亭可楽と名のりし三笑亭が

噺の語りき

文化十二年乙亥の日小田原町の稲荷社において坂山文五郎と云ふ者
落し咄を席に催して可楽の名をもて披露し　二十二年
のりしに語りしを可楽が直傳と記す

寛政十年戊午六月岡本万作に傚て山生亭花楽並落語講席ちらしの図

風流 浮世おとし噺 まづ何まり下谷 柳の稲荷社内におゐて よね沢のよるおゐてし 月の 立川金升 ○○亭瓢我 山生亭花楽

けふに
春夏亭艸露
選序

○金升は後に焉馬と改む

○まさに武人

○瓢我は後に司馬
切通しに寄席を構へ
讀ミ頃口鈍口
山の手辺
太平記讀

○三笑亭可楽と名のりして落語会を催せしは寛政十二申年を鼻祖とす　文化八未年の会で初度と書してある帯が残れり　寛政十二申年初会の会の摺物を深川親和門人華渓八翁の書画と云ふ　○立川談洲楼焉馬　桜川慈悲成　芝楽まちふ俗称大五郎　桜川杜芳門人戯作者　芝宇田川町に住　雕物師　之落語の一大家の傳別に記す　可楽三人の相会あり

烏亭焉馬が始めの会なり

より以前より咄の会の祖太郎ちくとぞくとん他より

其他二人のおはなしは是れ可楽とかしく会のはじめ

此会の第一東亭八子といふ人とかはりたるものにて咄の釋よろしき也

其門人に多子といふ者あり　後に三笑亭門人となりて東生亭世楽

といふ　破門せられ山遊亭猿松（エンシヤウ）と改りまた立川談

洲楼門人となりて烏笑と云ひ　當時三遊亭圓生といふ

[illegible]芝居役者は介科[illegible]一流の[illegible]
[illegible]一家乃名あり事

談洲樓焉馬翁門人
立川白馬落話會報條封筒並摺物三葉

[illegible]封筒
[illegible]尚左兵
俊滴乃書[illegible]
白馬子此頃は
浜城橋坂本町
桂木滴子住寺

[illegible]

東皇
名[illegible]
[illegible]伎之三葉

畫画和歌會 催主 白馬 丙寅

當日東都高名諸先生出席

来八月十日於[illegible]柳橋大の
廣八才[illegible]催し不論晴雨御相
集之在奉希上 [illegible]白

出座諸[illegible]連[illegible]名[illegible]賓客之[illegible]
[illegible]
筆之救[illegible]

丁丑秋

補助同人 [illegible]

山明松浄柳来栗安
樹深紅生浅黄試上
高楼清入骨岩如
春色使人狂

菴堂

文一ハ
谷文晁
門人
本張町三ノ目ニ
住シ利光良安
乃男ニ而ハ利光
當時茅研堀
ヲ住ス
文化十四年丁丑
乃ニ文一子
茅研堀ヲ
同居

菴堂
敬義
中井氏之
壮年の頃
狩歩を詠
て
貞九楼
腹唐秋人
と作名す
當時
淮南を
眉住社中
目出亭
納丸と
いふ人
此作名を
継り
敬義ハ
金吹所
橘廣屋
新右衛門
譜代乃
手代之
家ニ山伏
井之ニ在て
今尚橘
廣屋へ
勤む
貞九楼と
呼ふことの
おこりハ
志良氏
ゆゑ名の
付ハ五臂
定
くらうごとに
閑れ
よ一生房
おとり
ゆくとい
ちぶる
久ん平
右秋人の詠
あるかを
人て抵判
するとあり
りけれ
ふべから
詠りて
楼号に
ぬ事り
とす

[illegible]の庫
[illegible]
[illegible]
[illegible]
鶯邨

右三葉[illegible]掘物白馬初度乃會之
文化十四年丁丑秋八月十日發會

笑語樓夢良久落話會報條摺物二葉

書画會筵
并ニ宇治拾遺物語

十月五日朋友相[illegible]両國大の[illegible]
[illegible]右披漏仕長晴雨不論[illegible]光加馬
[illegible]帝 上ハ

九月

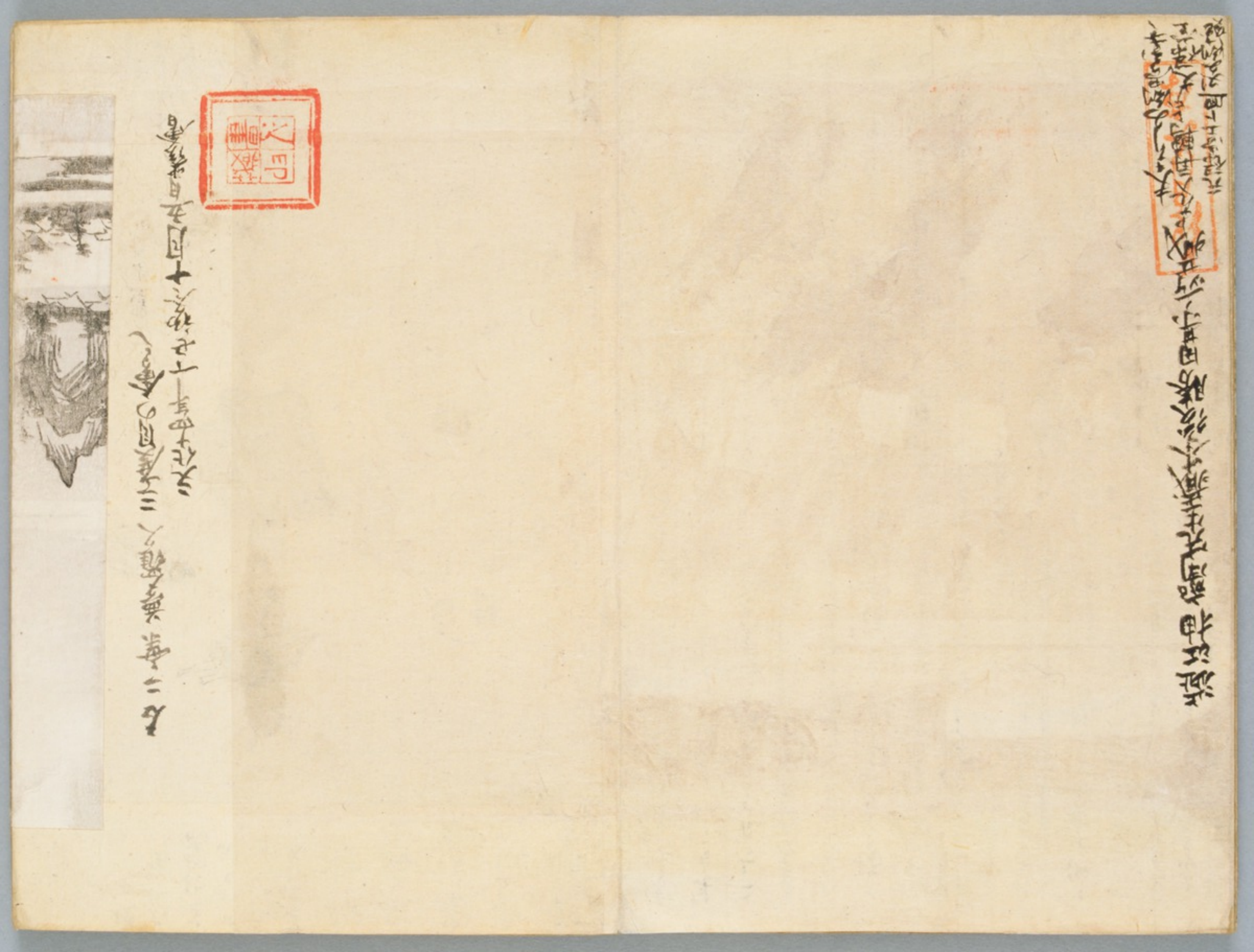
笑語樓
夢羅久

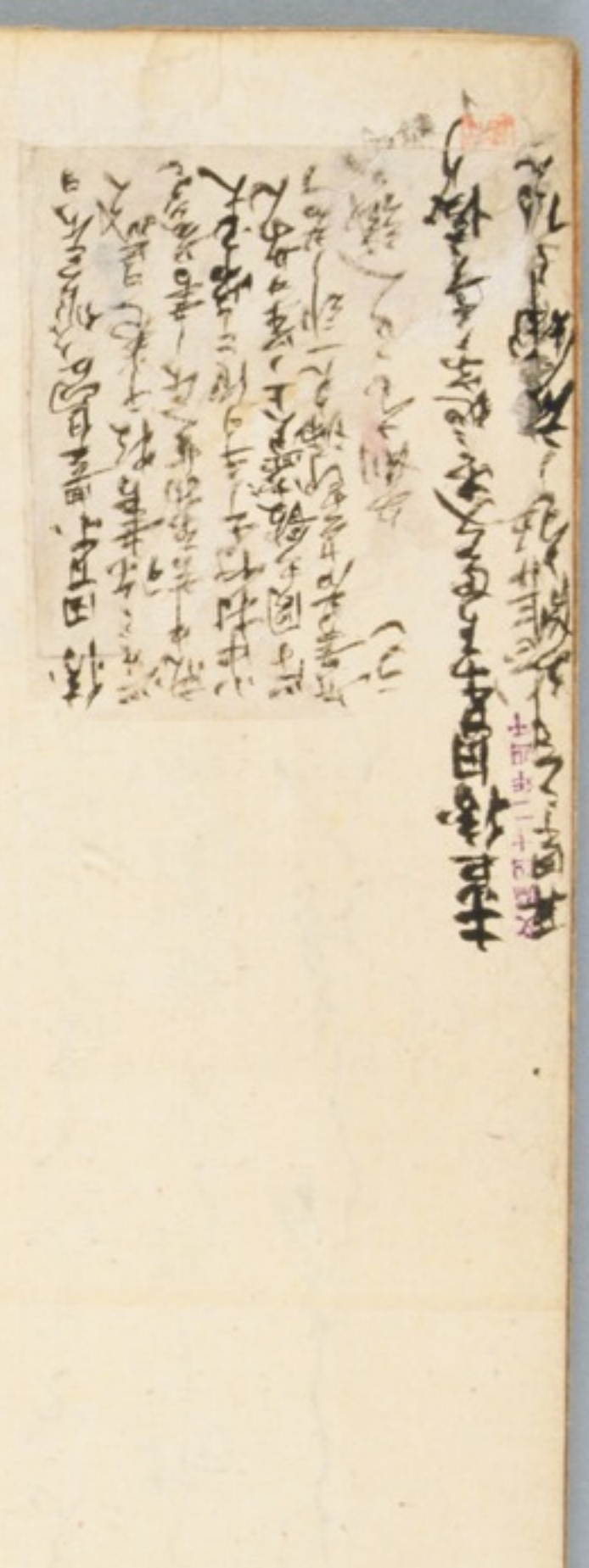
狂詩の名を
藤惣先生と
以ひ狂言の
名を四方赤良
といふ四方山人
俗称
大田立三郎
[illegible]
牛込
[illegible]
少右川学谷
南村
[illegible]
[illegible]

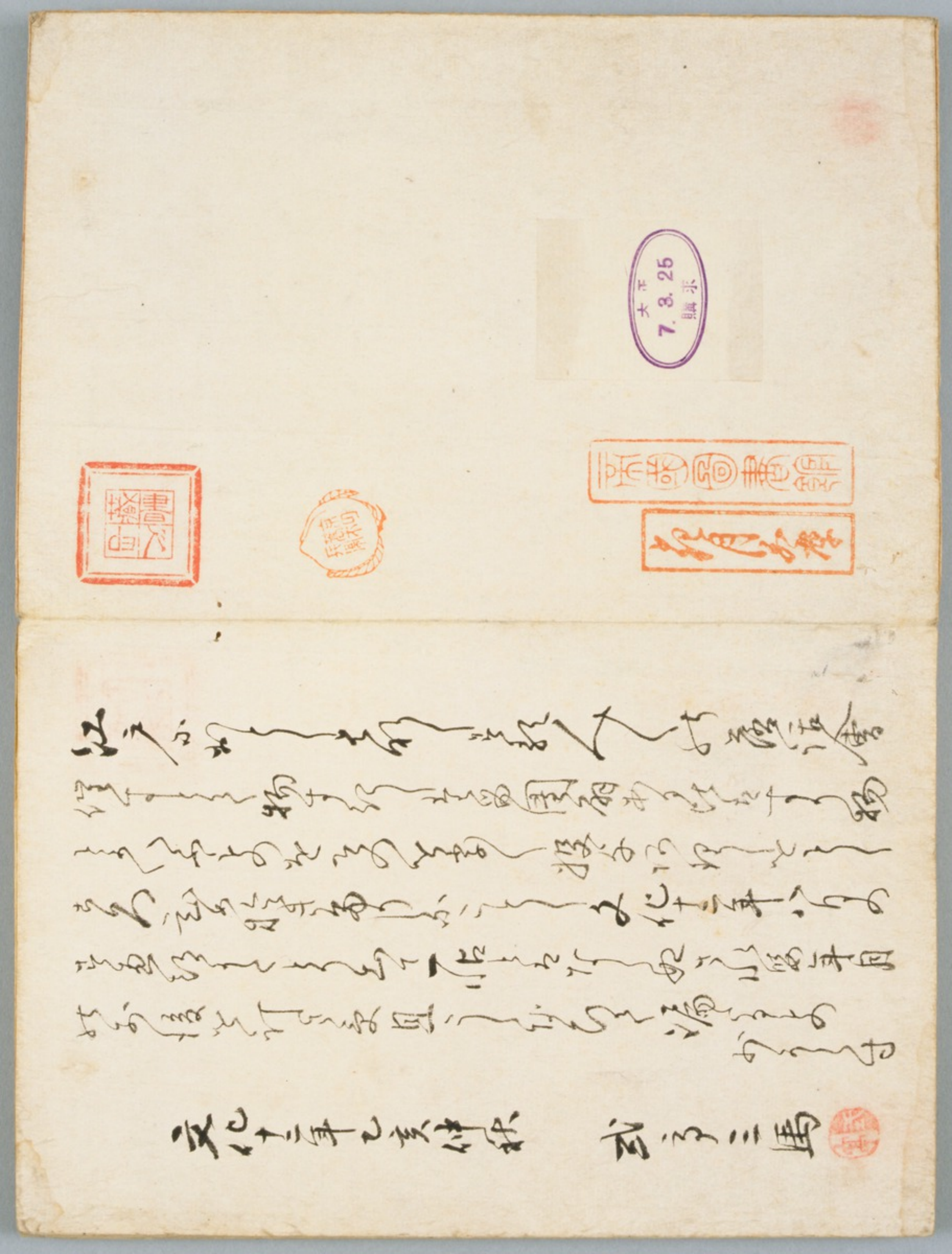
南畝
蜀山
遠接山人
陳富輪
巴人亭

別号狂言
尚時蜀山人
乃[illegible]歟
[illegible]

生國駿河者本國近
江州三国一山ゐ出鄙
出店手
唐人[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]







三笑亭可樂落話會披露之團扇

繪は武清筆
紙は雁皮絲

其裡面

文化八辛未年春
於両国柳橋大のし富八楼上披講

儲書は 徳瓶筆

當時馬喰所二丁目に住す
俗称徳を用ゆ 儲書を
業とす

落がはなし

[illegible]

扉のまき筆

[illegible]

三笑亭
可樂述

[illegible]

三題ばなしと
いふことの元祖之
寛政十戌午年可樂二十二歳すして
はじめて山生まれ花樂と名のりおとし話を作り始まる
[illegible]

当時日本橋上槙町ニ住す
七十余にして[illegible]
文化十三年の頃[illegible]

○[illegible]三笑亭可楽が初[illegible]

○可楽ハ[illegible]の人[illegible]自作を講じ他人の[illegible]
[illegible]に[illegible]三題[illegible]

○三題[illegible]

[illegible]

○文化[illegible]年[illegible]

[illegible]

朝寐房
夢羅久
落話會
披露之
摺物

文化六年
己巳八月
廿八日同
送於柳橋
大の字八
樓上

今英画

勝川九德齋
春英ハ旭朗
井春章の
門人當時
大坂町に住す

歌川一陽齋
豊國ハ一龍
齋豊春の
門人當時日
本橋上ニ住町ニ
住す俗称熊
吉

跡齋北馬ハ
北齋辰政の
門人當時下谷
三筋町組屋敷
に住す俗稱
有坂五郎八

拙亭翠敬ハ
儒者小松原周二
の男文化五年
北須本石町四
丁目新道に住
せしが當時ハ
[illegible]

秋夷こと
泉自吉筆

壽香亭目吉ハ雪舟家乃門人當時本郷ニ住す本名藤原守一俗称吉五郎生質使者之間ニ[illegible]渾名して目吉と呼べり再改吉兵衛

文化十一年甲戌秋物故

朝森坊主人笑話ニ不まれ高々ニ
會日の賑しき我思ひやりて
志語水戦たるせる澤ハ不ゝる不と
財布孔尻ハさそ光るらめ

山東京傳

晴雨不論自四時毛氈頻飾風流詞連中涵盛
無醒愛格別大人將莫遲

山東京山題

○

世[illegible]人をさへそ
のまゝ志ゝる志ひのか志ひまゝ
右ニ[illegible]口[illegible]

六樹園

山東京傳繪を北尾紅翠齋重政ニ学ぶ北尾澤齋改演と号す狂歌初号身恒折輔一名醒々老人當時根坐町ニ住す俗称京屋傳兵

京山ハ京傳の舎弟當時京橋太刀賣店ニ住す

六樹園狂歌ニ四方赤良の門人宿屋飯盛といふ

[illegible]

○

[illegible]

式亭三馬戯題

○

[illegible]

[illegible]

千穐萬歳大叶 [illegible]

[illegible]

石川雅望

[illegible]

右は朝寐房夢羅久が初度乃會なり事能辨才器
全く備りて今一家をなす事
俗称里見晋氣當岡方圓柳橋
同朋町東川君に住す

むらく初は夢樂とせしかり可樂門人はしらず及しが
いらかはゆゑありけむ夢羅久とせしかしかむ其先豊衍
宮戸左大夫は事子にて表徳を珍重とせしかゆゑ淨瑠璃語り
なりまき頑作をあらざれど人情に通じ當世は風俗と案
ず妙をはらせ今流行の魁首具員する人多し

此會あるに同市が拙作は相文一章を贈る立川爲馬老人席上に
おいて拙稿其文は田舍芝居忠臣花初編は是貢ありて既に同板
都理

林屋正蔵落話會披露之冊子
文化十二年乙亥三月廿五日宛進
於中橋下桔町木屋忠右衛門 播上

林屋物語

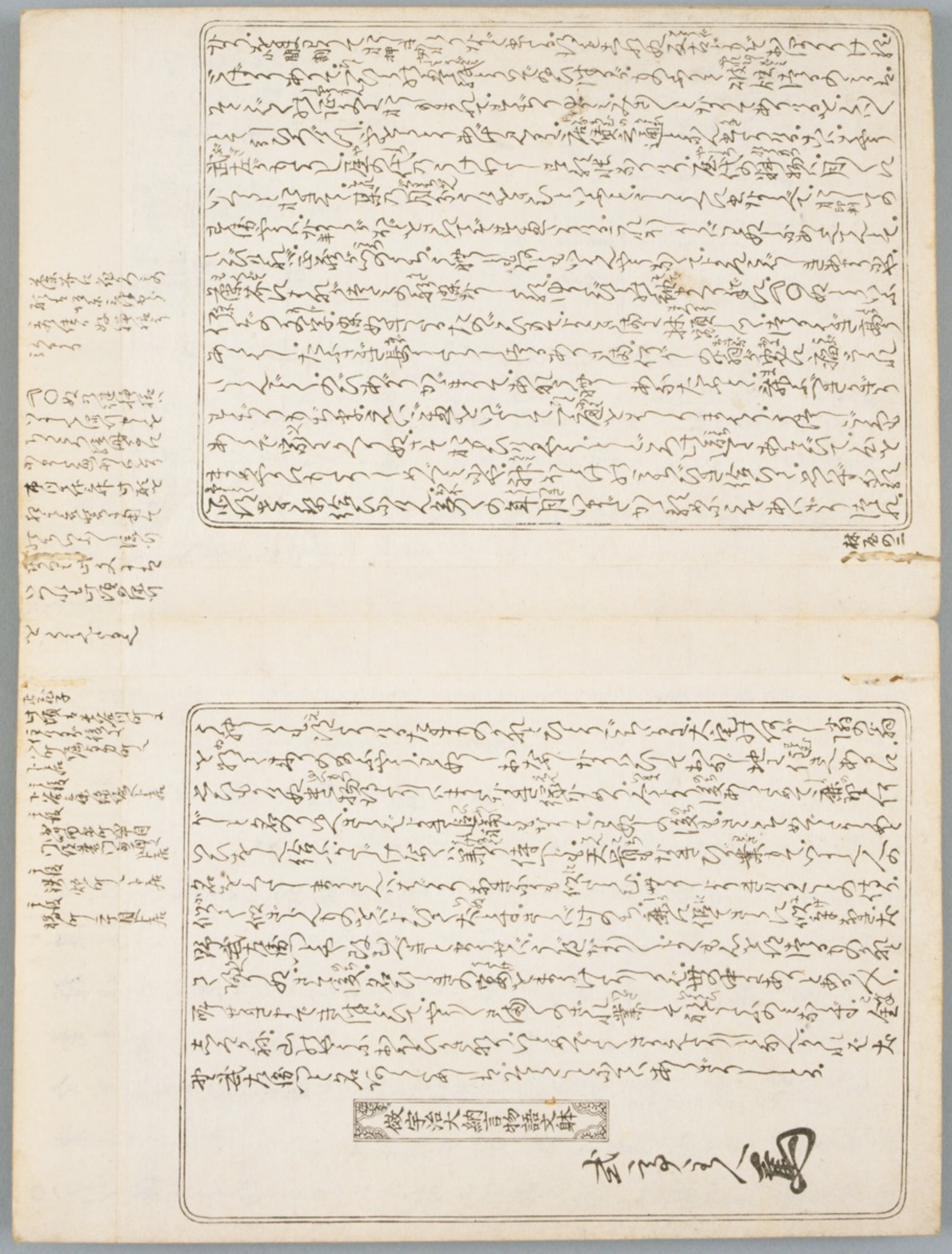
全

ちやしく屋物語

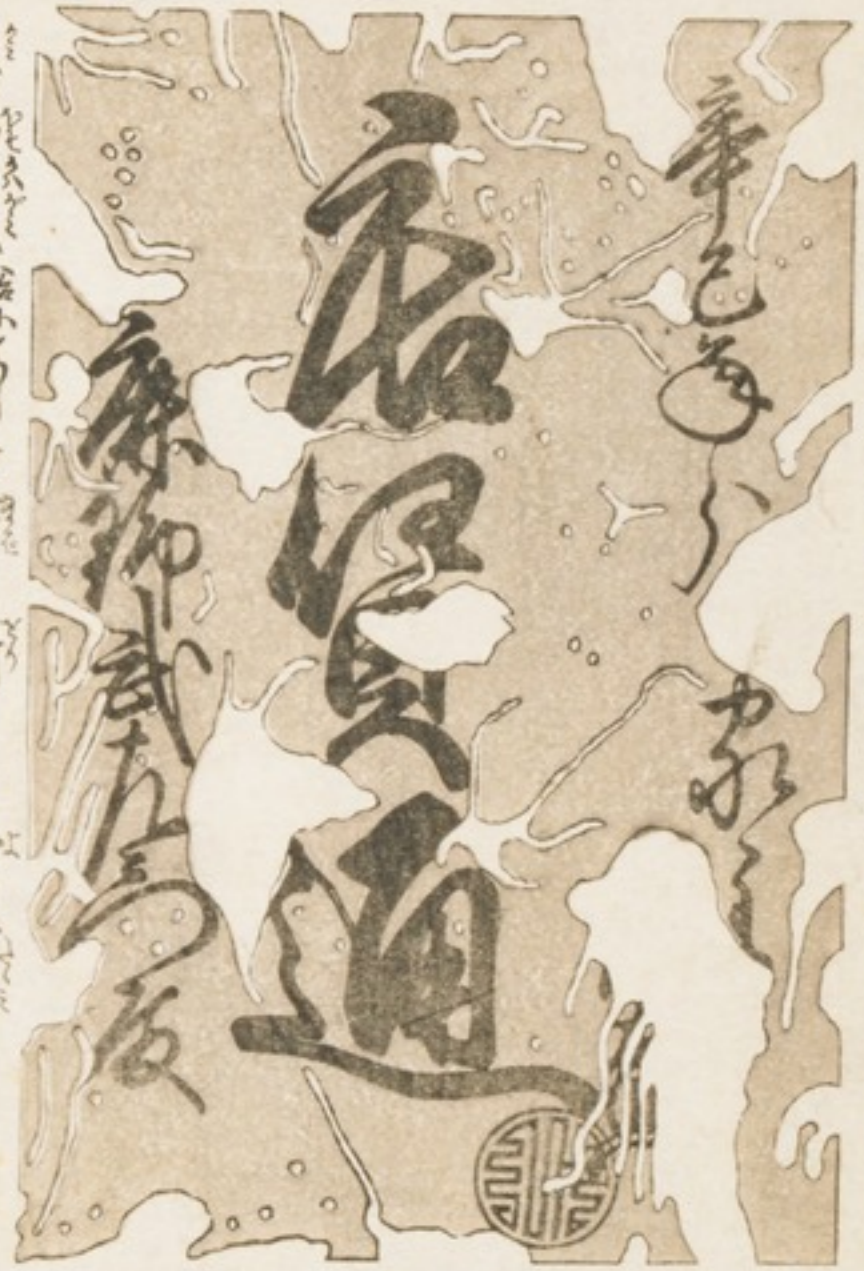
今はむかし。廉野武左衛門といひ給ひ人。武藤村岡江戸なる生谷川町に
なん住ひ侍。次男にしてこそ家にいふ業にいとゞ家にしまし者なりけり。
こしぢろ侍ひ家にまうけしけるなりしをば。廉野まき茅と号けて。いつまきの
さうしとなりしきいてのさうし今に残りて。ま稚くにハ見きといふ人も
ありけり。世をさるに見でこそ侍れど。道を稚侍ひとりけむ。その業を和ぶ
人くにつしくよりく物のこゝろふ中にも。おなじ生谷
川町に住ける。妹屋正藤となんいふ者ありける。はかしのこゝろを。弦の道にこゝろ
ざしふかくて。良秀がよぢり不動あるべんなどは。たゞこれものまゝなりけり。ぞ稚こと
かんどをりにふれては。敬六があくぞ居とけよめんなどは。おしうまのして。たゞ
多くはにしられることどもといひ。しかれ。見ぬもしは侍るなりけり。かれバよろづ
好人。はとのこゝろ物ぞるときくさびに。あてこゝでして兜まどいぬ者なんなりける。
世もをりしき人とよばれて。うぎりなき徳人なりき。ちうどなりにしく
おいさる男ありけれが。正ゝ花にうくいくく。世まをめだらしきちぐ乃
ありけるものなれ。見せんじやうけ住まくまふ家ハいまし人廉野武左衛門が

抹屋の一

家居をし地なりしよしハ。我がおほぢよりぞきゝ侍る。今より三代がなど
さきなりし屋なる人までハ古きかんづちは長に。りんが名志るをし物なりし
なし。今はいふにかなりぬるにかなどいふ。これハ我をたぶらきんぞる例のえせ
業にさふらいん。おぢなきことにさふらひなんといへど。狗はいくく。さらだ
まだ。至ちる人に回てこそ志るまんずらめ。此こと侍ゆゑなりもそうことなら
じといふ。屋なる人といふハ。家居をしんやうにと。我が領する家くをまもりける人を。
こうて。侍称まをあしきことなりしんやうにと。我が領する家くをまもりける人を。
家なるものゝためるハ侍るさぐ川人なりき。大宅乃何がしとて勢徳ある人なり
けれバ。里人ハ。ゑゞに大宅殿とぞいふなる。あるとうに大宅殿がりまゐりて。ことの
次第をばきまるを同おきしめ給ひ。さて謀捜と志つべき事物あらば我にしぞ
ゆへ。易はしにして金をしんぞをし。形人よりも稚くしきちぐまやあらんぞらん
といへバ。いさ我を志しず。ゑしうにありといへど。ふるくより何人なりし皮子
乃中さぐしてん。後のまはしぞ和ハさしにやらなし。今こゝ今こそとて従者
をよびて。皮子をてこといひけれバ。いしふるくやれちぎれて。堂家はうぐ和
いづくよしおぢしきを持来にけり。志ぐしゆへとて蜘絲をきさうてあしてさて
うきさぐり侍るに。かんべち乃性ハ稚あらで。ちやうぢ。志ぬはもちひわぐらう



○鹿野武左衛門所持店賃通之寫眞



○紙ハ細川紙俗ニ云ヒ申より折てまゐる四ツに至るより今ハ西之内紙もて裏まで賃束なる古のさま斯あらん歟
桜ぎるに辛巳ハ元祿十四年にあたり俗ニいふ刻ニ云ヒ
金もちらぎるとも云ヒ林屋が出帆氣想像至し

元祿の頃江戸に專ら行ハれし坐數仕形をもれしの達者鹿野武左衛門が持たりし店賃の通なり武左衛門ハ長谷川町に住す此頃等しく行ひ是ハ横山町三丁目に体菱中橋に伽羅小左衛門伽羅四郎為などおのく名あり
是ハ江戸鹿子
其ニ江戸図鑑ニ
もゆ

式亭三馬鑒定

林屋正藏藏版

林屋の三丁

右は林屋正藏が初度の會なり

正藏改名ニまゐる初て武左衛門が店賃之通に至るまです信を得るまゝ
初のまゝが得しまゝものしらるゝ

壽樂門人壽曉落話會披露之封紙並摺物

口上

私儀 惣容様御ゆるされ頼御取立雖有
仕合年存ゆ依之當四月十七日東西國尾上町
柏屋吉五郎方ニ於ひて落話舌講相催中の間
不限晴雨朝四ツ時ゟ御光駕を極偏奉希上

辰四月

催主 喜久亭 壽曉

當日 東都滑稽者 惣連出席

三馬様

セ 可樂
ハ 圓生
壽樂

壽曉ハ若松町道具屋万吉當時深川嵯峨町に住して家主役を勤む改名して
再云 矢野治助
文化十四年丁丑三月新吉原新宅ニ落成
女肆おのく
伝宅より祝り
りの頃壽曉子
も伏見所へ
物宅す

壽久亭壽樂ハ三笑亭可樂乃門人なり當時大坂町に住す講席ハ西国橋乃向て左のたもとより川に係る家を定席とし夜講ニ出す他所ニ勤ることなし

其先神田佐久間町
俗称 桑原屋
桑次郎
中頃 壽石と
あらしめ
後ちと
壽樂と
呼ぶ

青陽舎壽暁活會之摺物

文化五年戊辰夏四月催

蘭齋北嵩ハ北齋辰政乃門人當時神田佐久間町藤堂和泉守殿門前ニ住す

傭書ハ本所石原駒知道筆之俗称高麗(カウライ)以右郎 文化十二年乙亥春正月物故

朝寐房夢羅久再度落話會摠物　文化九年壬申三月廿三日會

てくみ
門人夢羅久
例乃友とらぬ御のめ
咲おもしろを立しき
諸君ゑ狂奮を祈見中ゑと
ゆとめふ恵しゐるなれ
こんせゆとふ事もさうえ
ゐ幾ハしきつとひを
祝ひ来るといふ
立川談洲樓
焉馬

婦人月七年れ
記さと八年樓
をりくむのしろ
花さうぢ

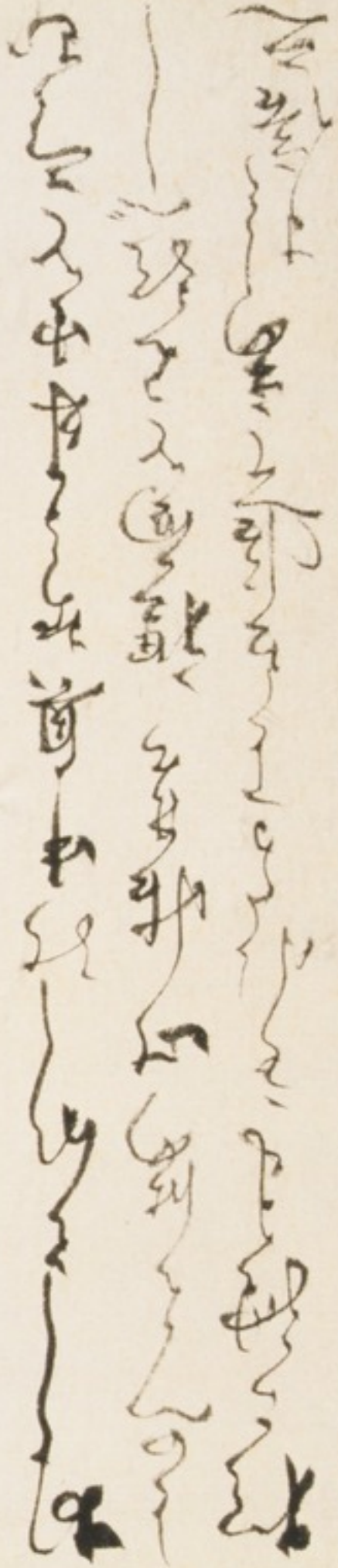
仝封緘

口演

追日暖氣お催陸益各様方書様強
能計拝作座頭重事なく拝ゑ当二十三日
不論晴雨当國柳そし大乃し富八方ゑ
拝ゐと江戸落噺惣連中おゐ拝ゑ
新作長物語技演仕間諸合作賑ゑ
作ゆゑ参るゝ程偏ゝ奉希上以上

笑語樓
夢羅久

三月



右は朝寐房夢羅久ぶ再度新會なるも
此内より立川談洲樓の門人となり頃笑語樓の号
人あらはれくれしまゝ何ゝ事ゝは朝寐房のこと記せり

式亭所藏

談洲樓門人
○立川金馬落話會の摺物失ひたゝ以上編より金馬俗称日吉善藏
會りは文化十年癸酉四月廿一日大のし樓上に開筵

おしまれし新中興なる朱雀と云ふむ
とゝ心ゝ落ぬ此帖ゝ程面とゝ報べし
相ゝ稱ゝもこれなることゝ迄て妻しゝ倍之

落語會
刷畫帖完

WA 19
16